ヒューマン・ケア研究　第3号
2002年10月　22-29頁

Journal of Human Care Studies, Vol.3
October 2002, pp.22-29

原　著

看護臨地実習における学内事前実習がセルフ・エフィカシーに及ぼす影響：母性看護学実習の場合

佐々木和義*・門脇　千恵**・池内　佳子***・竹下　由紀**

The effect of clinical pre-practicum on undergraduate nursing students' self-efficacy, trait- and state-anxiety, and fear of negative evaluation in maternal nursing practice.

Kazuyoshi SASAKI* , Chie KADOWAKI**, Keiko IKEUCHI***, and Yuki TAKESHITA**

Abstract

This study examined the effectiveness of pre-practicum in maternal nursing on self-efficacy in clinical practice. Subjects were 18 female undergraduate students in the second year of a baccalaureate program. Two days of pre-practicum was followed by three weeks of clinical practice in a hospital. Students completed 16-item General Self-Efficacy Scale, 25-item Maternal Nursing Self-Efficacy Scale, 30-item Fear of Negative Evaluation Scale, 20-item Fear of Negative Evaluation on Clinical Practice Scale, State-Trait Anxiety Inventory at one week before the pre-practicum, at the start and at the end of the pre-practicum, and after one, two and three weeks of clinical practice. Data were analyzed by ANOVA followed by the Tukey's test. Generalized self-efficacy, trait anxiety, and general fear of negative evaluation were not significantly altered by time of questionnaire completion, however maternal nursing self-efficacy rose significantly immediately after the start of pre-practicum. State anxiety tended to rise immediately before pre-practicum but decreased significantly over the three weeks of clinical practice. Fear of negative evaluation on clinical practice tended to rise between the start of pre-practicum and after one week of clinical practice, but began decreasing significantly after two weeks of clinical practice. From these findings, we concluded that the pre-practicum was effective for promoting self-efficacy in clinical practice.

キーワード：
(Key words)
母性看護学実習(clinical practice of maternal nursing)，事前実習(pre-practicum)，セルフ・エフィカシー(self-efficacy)，状態不安(state anxiety)，否定的な評価に対する恐れ(fear of negative evaluation)

臨床看護学実習は初めて本格的に患者に接する場面であり、学生にとっては多大なストレスであると予測される。しかし、看護実習とストレスの関係を扱った研究は意外と少ない。

丹羽（2000）は、3年課程の看護学生に対するソーシャルサポートが、臨床実習に対するストレッサーとしての認知的評価に及ぼす機能を検討した。認知的評価は、脅威的か、挑戦的か、有害的

*兵庫教育大学学校教育学部附属発達心理臨床研究センター（Center for Research on Human Developement and Clinical Psychology, Faculty of School Education, Hyogo University of Teacher Education）
** 愛媛大学医学部看護学科（Faculty of Nursing and Health Sciences, Ehime University School of Medicine）
*** 和歌山県立医科大学看護短期大学部（Nursing College, Wakayama Medical University）
2002年7月10日 受稿／2002年8月26日 受理

かについて評定させている。その結果、ソーシャルサポートは実習初期において効果的に機能をし、看護師からのサポートは、総ての認知的評価に対して有効であったが、看護教員からのサポートは脅威的評価と挑戦的評価には有効には機能していなかったと述べている。河村ら（1996）は、短期大学部の看護学生を対象に、臨床実習がストレスコーピングに及ぼす関係について検討した。その結果、実習成績の上位群が回避的コーピングをとる傾向が減少したと報告している。これらの結果は、臨床実習に関する教育に、ストレスを緩和するという方策を導入することの必要性を示唆している。

門脇ら（1993）は、女子看護短大生にCMIを実施し、第一看護学科生は、「目と耳」と「泌尿生殖器系」と「習慣」の身体的自覚症の3領域において訴えが多く、実習前（3年生3月）では実習後（3年生12月）よりも、「不安」と「過敏」の精神的自覚症の2領域において訴えが多いことを見出した。したがって、できるだけ不安をなくして、効果的な実習となるような配慮が必要であると述べている。この場合の不安は特性不安ではなく、状態不安であろうし、不安が高い状況での臨地実習では、他者からの否定的な評価に対する恐れ（FNE: Fear of negative evaluation）も高く、セルフ・エフィカシー（SE: self-efficacy）は低いと考えられる。

SEは、ある刺激に対して高いと、その課題の高いものを選び、持続し、成功する傾向が高い（Bandura, 1977）。また、SEが高いものは、状態不安が低下する（坂野, 1988）。Aber & Arayhuzik（1996）は、SEが高い看護大学生ほど、GPEで測定した学年末成績が高いことを示した。SEは、「バイタルサインの評価」、「新生児評価」、「清潔操作」、「酸素療法」、「鼻口腔からの吸引」などの看護スキル全般に関する項目から形成されている「臨床SE尺度」（Owen & Froman, 1990）で測定された。

SEを高めるためには、成功体験、モデリング、言語的説得、情動的喚起が重要である（Bandura, 1977）。Spence-Laschinger（1996）は、看護大学生の健康増進カウンセリング（禁煙指導、食事療法指導、運動指導）の実行に対するSEを、「患者への健康増進教育に対する自信に関する質問票」（Tresolin & Stritter, 1994）で測定した。その結果、最上級生が有意に高いSEを示し、実習を含めた教育経験が効果的であるとした。Ford-Gilboeら（1997）は、家族看護実習の前後に「家族看護セルフ・エフィカシー質問票」で測定し、実習が有意な効果をもち、学生は臨床場面での実践が重要と評定したと報告した。

これらの結果は、臨地実習が実習に関するSEを高めること、SEが高いものほど成績がよいことを示している一方で、臨地実習の前には不安が高く、高いSEは状態不安を低下させる効果があり、SEを高める手段があることを示している。したがって、臨地実習を効果的に行うためには、事前に成功体験を積むことによってSEを高めておくことが重要と考えられる。

本研究では、学内での母性看護事前実習が、母性看護SEを高めるか、状態不安を低めるか、母性看護に関するFNEを低めるかを検討することを目的とする。併せて、特性傾向である一般性SE、特性不安、一般性FNEには影響がないことを検討することを目的とする。このために研究1では、母性看護SEと母性看護FNEを測定する尺度を作成する。

研究1

目　的

母性看護SEと母性看護FNEを測定する尺度を作成する。

方　法

1）尺度の作成

母性看護SE尺度の項目は、母性看護学実習で行う項目として、筆者、母性看護学担当の助教授、講

Table 1　母性看護セルフ・エフィカシー尺度の項目

1. 妊婦さんの腹囲を測定する。	14. 新生児に授乳をする。
2. 妊婦さんの子宮底を測定する。	15. 授乳の後にゲップをさせる。
3. レオポルド触診を行う。	16. 新生児の沐浴をする。
4. 胎児の心音を聴取する。	17. 沐浴指導をする。
5. 妊婦さんに腹帯の巻き方の指導をする。	18. 妊・産・褥婦さんとのコミュニケーション。
6. 胎盤を計測する	19. 家族とのコミュニケーション。
7. 褥婦さんの乳房マッサージを行う。	20. 看護婦さんとのコミュニケーション。
8. 褥婦さんに乳房マッサージの指導をする。	21. 教員とのコミュニケーション。
9. 悪露交換を行う。	22. 疑問点を質問する。
10. 悪露交換の指導を行う。	23. ケース記録をまとめる。
11. 産褥体操の指導をする。	24. 看護計画を立案する。
12. 新生児のおむつ交換をする。	25. 母性看護学実習全般。
13. 新生児を抱く。	

Table 2　母性看護FNE尺度の項目

1. 患者さんからどう思われているか、今は神経過敏になっていない。
2. 看護師さんが私はよくやっていると認めてくれるか、今はあれこれ考えない。
3. 指導教員が私のことをどう評価しているのか、今は心配だ。
4. 実習仲間が私の失敗をどう思っているのかと、今は気にならない。
5. 指導教員が私のことをだめだと思うのではないかと、今は思わない。
6. 看護師さんから失敗をどう思われているのか、今は気になる。
7. 患者さんにどう評価されているのか、今は心配だ。
8. 実習仲間から私はよくやっていると認められるか、今はあれこれ考える。
9. 指導教員が私のことをどう思っているか、今は神経過敏になっている。
10. 患者さんが私の失敗をどう思っているのか、今は気になる。
11. 実習仲間にどう評価されているのか、今は心配ではない。
12. 看護師さんにだめだと思われるのではないかと、今は思う。
13. 実習仲間が私のことをどう思っているか、今は神経過敏になっている。
14. 指導教員から私はよくやっていると認められるか、今はあれこれ考える。
15. 看護師さんが私をどう思うかが、今は心配ではない。
16. 患者さんが私のことをだめだと思うのではないかと、今は心配ではない。
17. 看護師さんからどう思われているか、今は神経過敏になっている。
18. 患者さんが私はよくやっていると認めてくれるか、今はあれこれ考える。
19. 実習仲間にだめだと思われるのではないかと、今は思う。
20. 指導教員から失敗をどう思われているのか、今は気にならない。

師、助手の4名で協議して妥当と思われる25項目を選定した（Table 1）。この25項目を「全く自信ない」(1)から「非常に自信がある」(7)の7件法で回答するように構成した。

母性看護FNE尺度の項目は、学生の実習中にその行動を評価する立場にある実習先の看護師、指導教員、患者、実習仲間の学生からの評価とし、各々に、神経過敏になっている、あれこれ考える、心配だ、気になる、今は思うの5項目を設け、合計20項目（Table 2）を作成した。20項目を「全くそう

ではない」(1) から「全くそうだ」(1) の 5 件法で回答するように構成した。

2）対象者

看護大学の 2 年生女子18名。1 年次に基礎看護実習を受けている。他の専門実習での経験を排除するために、母性看護実習が最初の専門実習である学生を対象とした。

3）手続き

1998 年 6 月、学内実習の 1 週間前のオリエンテーション時と、学内事前実習の開始時とに、母性看護SE尺度と母性看護FNE尺度を実施した。学生には、これらの評価は実習教育の改善が目的であり、実習成績の評価には全く関係がないことをよく説明し、協力を求めた。

結果と考察

初回測定と再測定間の相関係数は、母性看護SE尺度では 0.80 で、これは 1 %水準で有意であり、再検査による信頼性はかなり高いと判断された。母性看護FNEでは相関係数は 0.76 で、これも 1 %水準で有意であり、再検査による信頼性は比較的高いと判断された。また、実習内容に基づいて看護担当教員の合議によって項目が形成されているので、内容的妥当性も高いと考えられる。

研究 2

目　的

次の 3 つの仮説を検証することを目的とする。①学内での母性看護事前実習は、母性看護SEを高めるが、一般性SEには影響をしない。②学内での母性看護事前実習は、状態不安を低めるが、特性不安には影響をしない。③学内での母性看護事前実習は、母性看護FNEを低めるが、一般性FNEには影響をしない。

方　法

1）対象者

研究 1 に同じ。

2）測度

母性看護SE尺度および一般性SEを測定するGSES（坂野・東條, 1986）、STAI（中野・水口, 1982）、母性看護FNE尺度、一般性FNEを測定する日本版FNE尺度（石川ら, 1992）。母性看護SE尺度は25項目 7 件法であり、25から175の値をとり、GSESは16項目 2 件法であり、0 から16の値をとる。STAIは状態不安も特性不安も20項目 4 件法であり、20から80の値をとる。母性看護FNE尺度は20項目 5 件法であり、20から100の値をとり、日本版FNE尺度は30項目 2 件法であり、0 から16の値をとる。

3）手続き

群構成に関しては、学内事前実習を実施しない群は設けずに、全対象者に学内事前実習を実施した。他の専門実習での経験を排除するために、母性看護実習が最初の専門実習である学生のみを対象としので、対象者数が18名と少なかった。したがって、2 群を設けるとパラメトリカルな検定を行うことができないために、実施群と非実施群を設けなかった。

各尺度を 1999 年 6 月からの母性看護実習にあたって、学内事前実習の 1 週間前のオリエンテーション時（以降、実習 1 週間前）と、学内事前実習の開始時（以降、学内実習前）、学内事前実習の終了時（以降、学内実習後）、臨地実習 1 週間の終了時（以降、臨地 1 週間後）、臨地実習 2 週間の終了時（以降、臨地 2 週間後）、臨地実習 3 週間の終了時（以降、臨地 3 週間後）の 6 回実施した。

学内事前実習は、3 週間の臨床実習の最初の 2

日間に実施した。18名を9人ずつの2つのグループに分け、実習項目のスケジュールに沿ってビデオ学習やモデル人形などを用いデモンストレーションを行った。その後、学生は、モデル人形を用いたり、互いに患者役割をしたりして、実技を行った。臨地実習は2つの病院に分けて、第1週は水曜日から金曜日までの3日間,第2週と第3週は月曜日から金曜日までの5日間行った。

結　果

1）母性看護SEと一般性SE

実習1週間前、学内実習前、学内実習後、臨地1週間後、臨地2週間後、臨地3週間後における母性看護SE尺度とGSESとの平均値をTable 3に示し、Fig. 1に図示した。それぞれ1要因の分散分析をした結果、母性看護SEは時期による有意な効果が得られた（$F(5, 105)=14.30, p<.01$）が、一般性SEでは時期による有意な効果が得られなかった。一般性SEの平均値は11.5から13.1の値をとっている。母性看護SEについては、実習1週間前は61.3（「あまり自信がない」）から臨地3週間後には107.1（「やや自信がある」と「かなり自信がある」の間）へと視認によると上昇している。テューキー法で多重比較を行ったところ、実習1週間前との間に、学内実習後および、臨地1週間後、臨地2週間後、臨地

Table 3　各測度の平均値

	実習１週間前	学内実習前	学内実習後	臨地実習１週間後	臨地実習２週間後	臨地実習３週間後
母性看護ＳＥ	61.2（22.6）	68.3（27.6）	96.5（16.7）	89.7（16.5）	99.9（20.5）	107.0（16.6）
ＧＳＥＳ	6.8（4.0）	7.1（4.0）	6.2（3.8）	5.5（4.3）	6.1（4.5）	6.4（4.1）
ＳＴＡＩ－Ｓ	47.5（9.6）	53.8（11.8）	56.5（11.5）	56.3（9.1）	52.2（11.8）	46.3（8.7）
ＳＴＡＩ－Ｔ	47.9（7.9）	50.7（10.3）	51.0（10.2）	54.6（8.5）	55.4（10.2）	50.6（8.7）
母性看護ＦＮＥ	41.9（16.4）	49.5（22.6）	52.6（20.8）	62.8（13.8）	58.0（16.2）	47.6（15.8）
ＦＮＥ	15.3（4.4）	14.7（7.3）	15.4（7.2）	15.9（6.1）	15.7（7.3）	15.5（6.9）

（　）内は標準偏差

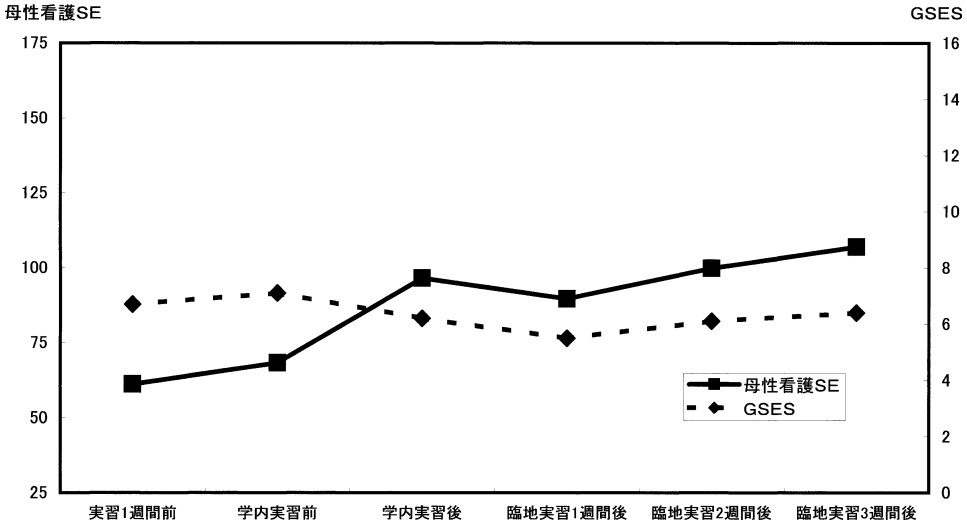

Fig. 1　母性看護SEとGSESの平均値の推移

3 週間後は 5 %水準で有意な差が認められた。さらに、学内実習前との間に、学内実習後および、臨地 1 週間後、臨地 2 週間後、臨地 3 週間後は 5 %水準で有意な差が認められた。

2）状態不安と特性不安

実習 1 週間前、学内実習前、学内実習後、臨地 1 週間後、臨地 2 週間後、臨地 3 週間後における状態不安と特性不安との平均値を Table 3 に示し、Fig. 2 に図示した。それぞれ 1 要因の分散分析をした結果、状態不安は時期による有意な効果が得られた（$F(5, 102) = 3.11, p<.05$）が、特性不安では時期による有意な効果が得られなかった。特性不安の平均値は21.5から23.2の値をとっている。状態不安については、実習 1 週間前は47.5であったが、視認によると学内実習後には56.5 と高まり、臨地 3 週間後には46.3 と元の水準に低下している。テューキー法で多重比較を行ったところ、実習 1 週間前と学内実習後との間に傾向差が認められ、学内実習後と臨地 3 週間後との間に 5 %水準で有意な差が認められた。

3）母性看護 FNE と一般性 FNE

実習 1 週間前、学内実習前、学内実習後、臨地 1 週間後、臨地 2 週間後、臨地 3 週間後における母性看護 FNE 尺度と一般性 FNE 尺度との平均値を Table 3 に示し、Fig. 3 に図示した。それぞれ 1 要因の分散分析をした結果、母性看護FNEは時期による有意な効果が得られた（$F(5,102) = 3.18, p<.01$）が、一般性FNEでは時期による有意な効果が得ら

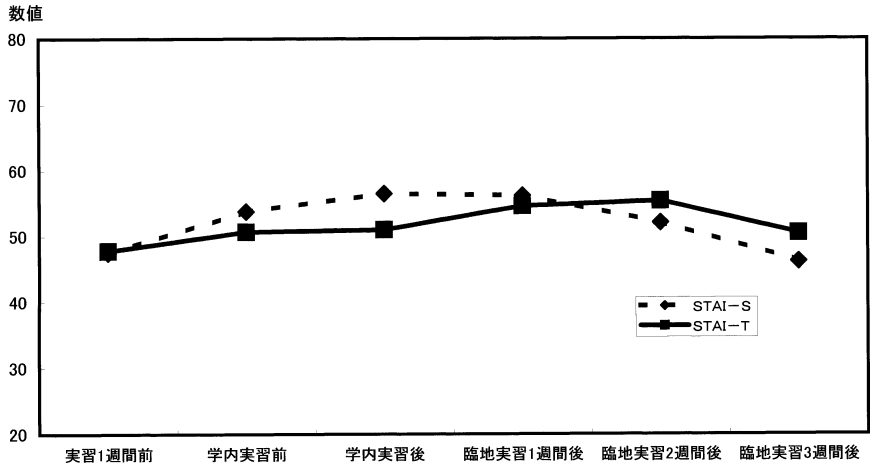

Fig. 2　状態不安と特性不安の平均値の推移

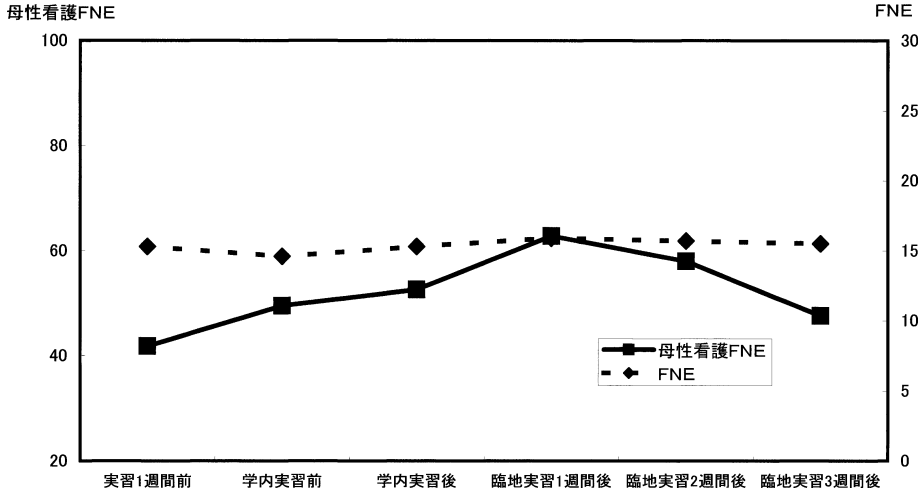

Fig. 3　母性FNEと一般性FNEの平均値の推移

れなかった。一般性FNE尺度の値は14.6から15.9の値をとっている。母性看護FNEについては、実習1週間前は41.9であったが、視認によると臨地1週間後には62.8と高まり、臨地3週間後には47.6と再び低下している。テューキー法で多重比較を行ったところ、実習1週間前と臨地1週間後との間に5％水準で有意な差が認められ、臨地1週間後と臨地3週間後との間に傾向差が認められた。

総合的考察

1）母性看護SEと一般性SE

GSES作成時の対象者は男女大学生で、平均値が6.58で1 SDが3.37であった（坂野雄二・東條光彦, 1986）。したがって、今回の対象者はその平均値から高い方に1 SDと2 SDの間にある。したがって、対象とした学生達は一般性SEの比較的高い傾向にあったと言える。しかし、学内実習前の母性看護SEは、「かなり自信がない」と「やや自信がない」の間に位置しており、一般性SEが比較的高くても、特定分野である母性看護SEは実習前には低いことが分かる。

多重比較の結果，母性看護SEは学内実習前には有意な変化はしていないが、学内実習前に比較して、学内実習後、臨地1週間後、臨地2週間後、臨地3週間後では有意に高まっている。さらに、臨地実習に入ってからは有意な上昇が認められていない。したがって、母性看護SEは学内実習の間に高まったと考えられる。

一般性SEには時期の効果が認められなかったので、学内実習も臨地実習もこれをさらに高めるような影響を及ぼさなかった。一般性SEは特性傾向であるので、特定分野のSEである母性看護SEの上昇のみでは効果を持たなかったと考えられる。

2）状態不安と特性不安

特性不安にも時期の効果が認められなかったので、学内実習も臨地実習も特性傾向としての不安には影響を及ぼさなかった。特性不安は特性傾向であるので、母性看護という特定分野に対する状態不安が低下したのみでは効果を持たなかったと考えられる。しかしその値は、とり得る値の中点付近にあるので、対象の学生たちは不安傾向に関しては問題のない学生であった。

状態不安は、実習1週間前には平均的な値であったが、学内実習後に最も高い値を示しており、測定時期の効果が有意に認められた。多重比較によると、実習1週間前から学内実習後にかけて、すなわち臨地実習前日の夕方にかけて高まる傾向にあった。この間に母性看護SEは、前述のように高まっているのだが、それとは独立に、状態不安は臨地実習が近づくにつれて高まっている。そして、臨地実習を経験すると有意に低下している。したがって、状態不安に関しては、実際場面での経験が重要と考えられる。

3）母性看護FNEと一般性FNE

日本版FNEの作成時における女子大学生の平均値は14.58であり、1 SDは9.81であった（石川ら, 1992）。今回の対象者の一般性FNEの値は、その平均値から1 SDの範囲にあり、平均値に近い。したがって、特性傾向としての、他者からの否定的な評価に対する恐れに関しては平均的な学生だったと言える。また、時期の効果は有意ではなかったので、実習は影響を及ぼさなかったと言える。一般性FNEは特性傾向であるために、変化がなかったと考えられる。

母性看護FNEは、多重比較の結果を見ると、実習1週間前から徐々に上がり、臨地1週間後に最も高い値を示している。状態不安は臨地実習直前にピークを示し、臨地実習を経験すると低下傾向に転じている。しかし、母性看護FNEはピークがずれ、臨地実習を経験しても暫くは上昇している。母性看護SEが高まり、状態不安が低下した状態で,さらに他人からの否定的な評価に目が行くのではないかと推察される。しかし、この傾向も臨地実習を

経験するにつれて、元の水準に低下していくことが分かる。

4）まとめと今後の課題

母性看護実習に関するSEを高めるために、3 週間の臨床看護実習に、最初の 2 日間に学内事前実習を組み込むという形態をとったところ、特性傾向である一般性 SE と特性不安と一般性 FNE には影響を及ぼさないということが明らかとなった。

当初の狙いであった母性看護SEは、期待通りに学内事前実習の前後で有意に高まり、その効果が検証された。状態不安と母性看護FNEはそれとは独立の推移を示した。状態不安は、学内事前実習の終了後、すなわち臨地実習の直前に高まり、臨地実習を経験する過程で低下することが示された。母性看護FNEは、状態不安が低下しても未だ高まり、その後低下することが示唆された。

門脇ら（1993）は、臨地実習前は臨地実習後に比較して、「不安」と「過敏」の精神的自覚症の 2 領域において訴えが多いことを指摘している。これには状態不安の成分が大きく関与している筈である。今回の結果は、臨地実習はもともと問題のなかった特性不安に対しては影響を及ぼさないが、状態不安に影響するという結果であり、反応としての不安に影響するということが示された。しかし、単に単に臨地実習を体験させて状態不安の低下を待つよりは、何らかの教育的配慮をすべきである。まず考えられるのは、不安喚起場面での対処行動を予め教育しておくことである。状態不安がピークに達した時点では、その事態に対するSEが有意に高まっていた。したがって、学内事前実習でSEを高めることの有効性が示唆されるが、その確認が今後の課題である。

今回は、事前実習がSEを高めることを示すことができたが、それが実習成績にどのように影響するかは検討することができなかった。また、他領域の看護実習でも同様の結果が得られるのか、事前実習と臨地実習の内容との関連はどうなのかなど検討すべき事項は多くある。

文　献

Aber, C. S. & Arayhuzik, D. 1996 Factors associated with student success in a baccalaureate nursing program within an urban public university. *Journal of nursing education*, 35, 285-288.

Bandura, A. 1977 Self-efficacy: toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84, 191-215.

Ford-Gilboe, M., Spence-Laschinger, H. K., Laforet-Fliesser, Y., Ward-Griffin, C., & Foran, S. 1977 The effect of clinical practicum on undergraduate nursing students' self-efficacy for community-based family nursing practice. *Journal of Nursing Education*, 36, 212-219.

石川利江・佐々木和義・福井至 1992 社会的不安尺度FNE・SADS の日本版標準化の試み . 行動療法研究 , 18, 10-17.

門脇千恵・大平光子・松木悠紀雄 1993 女子看護短大生の愁訴について－修正CMI の分析から－ . 第24回日本看護学会集録（看護教育）, 8 -11.

河村一海・西村真実子・永川宅和 1996 看護臨床実習前後の行動特性とストレスコーピングの変化. 金沢大学医学部保健学科紀要 , 20, 115-118.

中野克治・水口公信 1982 新しい不安尺度STAI 日本版の作成 . 心身医学 , 22, 107-112.

Owen, S. V. & Froman, R.D. 1990 Early identification of B.S.S.N. students at risk for failure, Poster presented at the Eastern Nursing Research Conference, New York, NY.

坂野雄二 1988 テスト不安の継持的変化に関する研究. 早稲田大学人間科学研究 , 1 , 31-44.

坂野雄二・東條光彦 1986 一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み . 行動療法研究 , 12, 73-82.

Spence-Laschinger, H. K. 1996 Undergraduate nursing students' health promotion counseling self-efficacy. *Journal of Advanced Nursing*, 24, 36-41.

丹羽さよ子 2000 臨床実習における看護学生に対するソーシャルサポートとストレスとの関係 . 看護展望, 25, 380-387.

Tresolini, C. & Stritter, F. 1994 An analysis of learning experiences contributing to medical student' self-efficacy in conducting patient education for health promotion. *Teaching and Learning in Medicine*. 6 , 247-254.